
覇者の三剣（トリスアギオン） 異端の剣守り

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリスアギオン
覇者の三剣 異端の剣守り

【Nコード】

N57960

【作者名】

蒼

【あらすじ】

人が神に抗う中、二人の少年は神に抗う、一人は転生者にして運命を知る者、もう一人は絶望を知らながらも抗い続ける一族の末裔。

天剣、地刃、人刀、三剣が交じり合う時、人が迎える結末とは？

絶望しながら希望を求めて抗う少年達の戦いが始まる。

運命を変える剣守り（前書き）

……厨二病入ってますがどうぞ

運命を変える剣守り

「……智慧の禁果ボックスエデン、解放オープン」

「魂源大領域ループ・デープ、認識アクセス」

静かな言葉が紡がれる。

「神理の欠片エクストラ、顕現セラ！」

刹那、世界が変化した。

「…………ふう、」

そして5分後、辺りに血臭の漂う中、立っていたのは一人の少年のみ。

異魔人メギド、そう呼ばれる存在が世界に現れた世界。

人に限りなく近くして人に非ざる生物。

ニメートル近い人型の肉体を持つこの生物は、ある日突然この世界に現れた。

人型でありながら知性はないに等しく、ただその旺盛な食欲に支配されており、その対象は人間のみに限定される。

その肉体は筋骨隆々といった表現ではおぼつかないほど筋肉が発達しており、グロテスクな肉感を抱かせる。

硬質な表面と浮き上がった血管と思しき数多の筋もそれを助長している。

全体的にくすんだ緑色の体表は、それが自然界の動物とは一線を画す存在であることを如実に表し、さらにまがまがしいまでに研ぎ澄まされた爪、先端が尖り太くしなる尾、鬣のごとく揺れる長い頭髮、そしていかなる肉でも食い破るであろう牙の羅列が、その食欲と嗜好を感じさせる。

やや前傾気味の姿勢は肉食獣のそれを想像させるが、その立ち姿は紛れもない二足歩行――人と等しき万物の霊長たる姿だ。

では、この存在は人か獣か？

それについては今現在議論がなされており、未だに決着はついていない。

ただ言えることは異魔人はこの世界の存在ではなく異世界の存在であること、そして全ての人間の敵であるということだ。

異魔人が現れて十年、人は未だその存在を倒せていなかった。

「~~~~♪」

そしてある街では二人の人の少年が立ち上がった。

街を鼻唄を歌いながら歩く少年は一体、見た目に反して何を背負っているのだろうか。

………物語はまだ始まったばかり。

運命を変える剣守り（後書き）

たまに気が向いたら更新します。

設定&説明（前書き）

説明です

設定&説明

用語

異魔人^{メギド}

この世界に現れた人類の敵。異世界の生物であることが確認されている。群れで行動し

「魔の裂門」(シャル・ゲヘナ)と呼ばれる門を通って異世界からこちらに来る。

また個体にランクがあり

下級^{エナリア}

中級^{クトニア}

上級^{レリウーリア}

の三つに分けられる。

下級は群れの下っ端であり、人で言えば一般人と同じ存在。^{エナリア}

中級群れのボスであり人では達人と呼ばれる存在である。^{クトニア}

上級はまだ実在の完全な証明は為されておらず。遭遇した記録も五指^{レリウーリア}に足りるほどしかない。

また特殊能力として物理攻撃の無効化と魔合い(テフム)がある。

魔合い（テフム）

人間の原始的な恐怖を呼び起こして動けなくする

地刃

異^{メギド}魔人の王。

詳細は不明。

天剣 人が神と呼ぶ存在、人を現在の姿に進化させた。

人刀

人が持つ最強の刀。

地刃、天剣、と対をなす刀であり 三剣と呼ばれる存在、蒼の持つ封刀裏正宗のことである。

剣守り

三剣と呼ばれる存在を守る人間を指す言葉。

人刀の剣守り

封刀裏正宗とその使い手を守る人間であり、地刃、天剣に逆らいし者を指す。

三剣称

人刀の剣守りが伝えてきた口伝書。

メギド
対異魔人にたいする対応策や真実。

研究結果などが書かれている。

未だに世界が知らない異魔人の真実が綴られている。

アダム・バルフ
極者

エクストラ
神の理と呼ばれる力に目覚めた者を指す言葉。

登場人物や場所

武街 周囲を金属の壁に覆われた対異魔人最後の砦。物語の主な舞台。

なぎりあおい
那斬 蒼

メレフ
アダムバルフ
人刀 封刀裏正宗を扱いし刀神 属性王の極者。

最近真武学園に転入、それまでは海外にて傭兵。

ひりゆうかなめ
飛流 要

人刀の剣守り、蒼の親友であり理解者。
性格はドS

四門朱雀

真武学園二年武系最強の男。妖刀村正の使い手。
とある理由から蒼を狙う

けんおう
剣翁

地刃の剣守りを束ねし男

武街の権力者と通じて蒼達を狙う。

月島琴美

武芸の名門月島家の生まれ、一年木組に所属蒼のクラスメート。

裏の剣守り

主人公が所属する剣守りの剣守りであり人刀にしか存在しない。

古より世に三剣あり。

剣が一、それ天剣なり。

その力、唯一にして絶対

人の求めし神たる力の剣なり。

剣が二、それ地刃なり。

その力、無比にして凶悪

魔を統べし王たる力の剣なり。

剣が三、それ人刀なり。

その力、天剣と地刃に及ばず。

されど案ずるなかれ。

人刀に選ばれし者、それ即ち刀神なり。

その者三剣の因果を断ち斬りて、我らが悲願を成就せり。

――『三剣称』序文より抜粋

その街は世界を拒絶していた。

世界の現状を否定し、強固な壁で世界とその身を隔て、内で世界と戦う牙を研ぐ。

そんな街でひそかに戦いは始まっていた。

第一章 剣守り飛流要

「……天剣の動きはまだそれほどではないか……なら注意すべきは地刃の剣守りだな」

「……ああ、奴らは最近派手に動いている、武街にも先兵が入りこんでいるぞ」

「……だがすでに人刀の剣守りが……飛流 要が動いている、俺達は見守るべきだろう」

「王である那斬 蒼ももうすぐ武街に入る」

「ならば俺達は天剣を注視すべきだろう」

「同感だ、三塚 七人を見張れ、以上だ」

「……了解」

裏の剣守りである少年、宮原 紅 は仲間に指示をすると静かに目を閉じた。

異魔人襲来により新設された対 異魔人戦士の養成学校である。

もし事情を知らない者がいれば何故そんなものが必要なのか理解に苦しむだろう。

確かに異魔人は脅威だ。

まがまがしくも逞しいその体の身体能力は脅威的で並の人間では太刀打ち出来ずに食われるであろうことは分かる。

しかし所詮は生物、近代兵器を駆使して、即ち銃を使って駆逐すればいい、と考えるだろう。

しかし異魔人はその驚異的な身体能力の他にもう一つ特性を持っていたのだ。

それは近代兵器の無効化

それにより異魔人出現当初に出動した軍隊はことごとく壊滅した。

銃はおろかミサイル、毒ガスすら効かず車で跳ねても無駄だった。

彼らの身体は異世界の法則に支配されておりこちらの物理攻撃は何の意味も持たなかったのだ。

それゆえ異魔人を倒す唯一の手段は白兵戦。

人の手によるパンチや斬撃といった所謂「気」を纏った攻撃のみが通用する。

しかし始めに述べたように並の人間では異魔人を倒すことは不可能。

故に倒すにはかなりの肉体の修練が必要となる。

そしてそれを教えるのが周囲を最新の合金で出来た壁で囲まれた、世界で1番安全な街、《武街》にある真武学園である。

そんな学園で授業を受ける生徒がいた。

一年木組 木山 空

取り立てて成績も良くない平凡な生徒だ。

しかしその正体は裏の剣守りに見初められし十二者の一人だ。

そして裏の剣守りである宮原 紅の親友でもある。

しかし彼はそれを隠す、あくまで自分は表に出ない、ただサポートするだけ。

そう決めているからだ。

彼の視界の端で人刀の剣守りである飛流 要が顔を動かす。

……どうやら王^{メレフ}が那斬 蒼が来たらしい

「……ようこそ武街へ」

空は蒼に言葉を向けた。そのあとやってきた蒼がいろいろ起こしたが無事終わった。

そして放課後、空は蒼と要が見守る中、四門 朱雀と向きあっていた。

「……貴様、俺はその男に、那斬 蒼に話しているそこを退け！」

今 空が相手にしているのは四門 朱雀 剣道部主将にして二年武系最強の男

「……それは出来ませんね四門さん、貴方は間違っている、無駄に剣を向けずに退いてくれませんかね？」

そんな剛の態度に朱雀は敵と見たのか襲い掛かかってきた。

しかしそれは遅い。

「ふん、」

「な!？」

やすやすと朱雀が振るった村正をかわした空は反撃の一撃を朱雀に加える

「なっ!？」

すると朱雀の手から村正が自然と落ちた。

しっかり掴んでいた筈の剣を奪われ動揺する朱雀

「とりあえず、この場は退いてくださいよ、無駄に怪我させる気もこちらにはないんで」

「なっ、き、貴様！ 俺を舐めているのか！」

激昂して殴りかかってくる朱雀。

空は動かずまともにくらった。

（バキッ！）

そして明らかに骨が砕けた音が響く。

しかし……

「ぐああああああ！」

悲鳴をあげたのは朱雀だった。

殴った筈の彼の拳が砕けたのだ。

「……へえ、凄いですね、さすが四門さん 駆身レベル5 識身
レベル4ってところですね」

空がその姿を見ながら冷静に言葉を紡ぐ。

「……何だ、蒼との戦闘が見られるかと思えば……とんだ期待ハズ
レだったな」

そう言うと言は背を向けて去った。

「……先輩、次は俺が相手してやるからいらない真似はするなよ」

蒼もそう告げて去る。

「……………いずれまた」

そういつて空も去った。

そして後に残された四門朱雀は空達の力を知ろうとして事件が起きた。

ちなみに何故こうなったかを説明すると長いがある事情から四門朱雀が蒼に戦いを挑んだ所に割ってはいったのだ。

王を守るが彼の役目。

side要

……………奴の名は木山だったか。
四門朱雀を退けたあの力は…………
やはりこの学園は侮れんな。

あの後蒼と別れた要は家路についていた。

自宅は街外れに位置しているため、学園の生徒と顔を合わす機会も少ない。

あくまでも自分のリズムで家路につく。

しかし、今日は多少変化があった。

本来通る必要のない区立公園に赴き、アスレチック器具から離れた広場に向かう。

さらにその隅、公園のそこからは影となり、木々が生い茂り昼でも暗い場所で足を止める。

夕暮れ時と幼児が少ない武器街の状況が重なり、公園内にも人はいない。

周囲の様子を確認し終え、要は背後を振り向いた。

「……いつまでついてくる気だ？」

うんざりような言葉に、彼の後ろに潜んでいた男が破顔した。

それだけで品性が窺い知れる下卑た傲慢な笑み。

タンクトップと股間に余裕を持たせた迷彩模様のズボンは、その筋肉が発達した頑強で大柄な肉体と合わさって、男が暴力を糧に生活していることを感じさせる。

丸刈りの頭の顔付きも粗暴きわまりない。

「……いつから気付いてた、坊主？」

「最初からだ。俺が学園を出てからずっとつけ回していたな」

「ほう……ちょっと見直したぜ。あんな学園の奴にしちゃ、

多少骨がありそうだ」

男がこれ見よがしに指を鳴らし、威嚇する。

おそらくは対寝技との攻防も視野にいれた実戦空手か総合格闘技の経験者。対異魔人戦はともかく、普通の喧嘩では負けなし。そして、国の税金で育成される真武学園の生徒を見下している。

要は分析を終え、面倒そうに尋ねた。

「で、何の用だ？」

「な〜に……すぐ済むさ。ちょこつと相手してくれりゃいい。お前の力を見たいって人がいるそうだ」

再び笑う男に対し、要は目を細めた。

恨まれる覚えはさておき、力を見たいとなると話しは別だ。これは襲撃ではなく様子見――自身の力を測るための刺客。

「――止めないか？」

「あ〜ん？」

「金で雇われているんだろう？ なら、金だけ貰って適当な報告をすればいい。何なら俺が上乘せした金を支払ってもいい。十万程度なら今出せるし、交渉次第ではその十倍だって構わない。お互い無駄なカロリーを消費するのは止めないか？」

意外な申し出に、男が一瞬怯む。

怯えた命乞いならまだしも、こうも堂々とした交渉はまったくの想定外だ。しかもかなり割がいい。金だけが目的なら、要の言葉に乗るのも悪くない。

しかし――

「……悪いが、俺は結構信用を重んじててなあ……それに……お前みたいな小憎たらしいガキは嫌いだね!」

言うや否や、フック気味の右拳が飛ぶ。様子見どころか、間違はなく斃しにかかった一発だ。顔に当たれば、顔面粉砕は確実だろう。事実、そうだった。

「無能」

――あれ……!?

男は目を疑った。自分の拳が目の前にある。勢いのついたそれは、自身の意思を受け入れずそのまま鼻にぶつかってきた。

――何故!? 何故、俺は俺を殴ってる!?

まったく理解不能なまま、自慢の拳は鼻を碎き、ついでに前歯も二、三本持って行った。

男は衝撃で地面に片膝をつき、要を見上げる。

彼は先ほどと同じく、ただ飄然と立ち尽くしている。観客がいれば、これはどんな趣向の芸かと思うだろう。

要を殴らんとしたはずの拳は、いきなり進行方向を変えて男自身に叩き込まれた。

要は――特に何もしていない。少なくとも、男には何が起こったか理解できなかった。

一瞬要の右手が動いた気がするが、それだけだ。

防御もカウンターの動きも示してはいない。

「どうする、まだ戦るか？」

「お前、何を……！」

「俺は争う気はない。そちらが条件を呑むなら、金も払うし病院にも連れて行くが？」

あくまでも平和的な交渉姿勢を崩さない要だが、男は怒り心頭といった面持ちで立ち上がった。

紅潮した顔は血に彩られ、狂気の度合いを帯びている。

「お前……殺してやる！」

激高する男に、要は溜息をついて右手を突き出した。

その袖口から、細身のナイフが飛び出す。袖口に銃を仕込むスリ―ブガンの仕掛けを、ナイフに応用したわけだ。用法としてはむしろ暗器に近い。

――コイツ……！

男は多少動揺したが、この程度は許容範囲だ。元々は自衛隊に所属し、刃物相手の戦いもある程度こなしている。

大体、あの程度の刃物で自分を刺せるか――そう思って口元を歪

めたとき、ナイフの刃が伸びた。いや、飛んだ。

「なっ……」

一般には流通していない、バネを仕込んだスペツナズナイフ。独自に改良されたそれは柄のスイッチを操作することで、刃が飛び道具となって男のふとももに突き刺さる。それほど深くはないが、鋭い痛みと予期せぬ攻撃に男の顔が歪み、再び片膝を突いてしまう。

そこに駄目押しの一撃が来た。

いつの間にか距離を詰めた要が、ためらわずに刃の根元の部分を踏みつける。刃はさらに深々と突き刺さり、男は出血の中で苦悶の声を上げた。

「ギャ……」

「五月蠅い」

声が出る前に要が右手で男の喉を締め上げる。

その信じがたい握力に、男は悲鳴を握り潰され、生命の危険まで感じた。間違いなく、この少年は自分を片手で絞殺できる。

「大腿動脈は外してやったんだ、もう少し静かにしろよ」

無表情で言い放ち、手を離す。何の感情も宿らぬ瞳に、男は怒りも忘れてただ畏怖の視線をむけることしかできない。

「やれやれ……ずいぶんと手間をかけさせとくれるな。ざっと見て駆身レベル2、識身レベル1の無能なクズごときが……本当なら

即銃殺してやりたいが……さすがに街中だと面倒だし、そもそもお前の雇い主も聞かなきゃならない。無駄なカロリー使わせてくれるな」

軽い怒りを秘め、要が男のふとももから刃を抜き取る。当然上がるはずの苦悶の声だが、要がその鮮血に塗れた刃を首筋に突き付けたため、またも声は出す前に止められた。

「答えろ、誰に雇われた？」

しかし男は答えられなかった。

このガキは何者だ！？

無表情で人を刺し、さらに完全に自分の論理で話を進めて怒っている。

ただの優等生どころか、とんでもない怪物だ。

「どうした、早く答えろ」

刃が軽く首に食い込む。だが、男は要を満足させる情報を持ち合わせていなかった。

「……知ら、ない。ただ……金と、お前の写真を……」

呂律の回らない口調に真実を感じ取り、要は溜息をついた。

「……中々の相手だな。一応確認はしておくか」

刃を突き付けたまま、要は男の服を探り出す。少しでも情報を得

るための行為だが、男からすれば脅迫を越えた命の危険だ。数分と経たないうちに要は探索を諦め、冷たい瞳で男を見据える。

「収穫は無し、か。 となると後はお前を拷問にかけるぐらいしかないわけだが……」

――ご、拷問？

耳を疑ったが、要の目は本気だ。狂ってるわけでも怒っているわけでもなく、冷静にそれが最も適当だと判断した結果でしかない。

「しかし、場所が場所だから時間もかけられない。 人気のない場所まで運ぶのも、途中で人目を引く……となると、この辺にしとくか」

要は刃の血を拭い、袖口にしまう。

ようやく終焉感じ、男の粗暴な顔が似合わぬ安堵の相を浮かべる。

だが、飛流要という少年はそれほど甘くない。

「何安心してるんだ？ 俺に無駄な手間を掛けさせた罪は重い――せめてもの償いに、見せしめになってもらおうか」

冷たく言い放ち、 要は男のタンクトップの後ろ襟を掴んだ。そのまま有無を言わせず片手で引きずっていく。

「ま、待てお前……！」

百キロを越す男が、まったく抵抗できずに運ばれていく。 要は男の言葉に耳を貸さず、ただ公園内にある見慣れた場所に向かう。

十秒程度でたどり着くそこには、誰もが目にする金網で作られたごみ箱が設置されている。そして、お決まりの謳い文句がプレートに刻まれていた。

「ごみはごみ箱に」

「お、お前……」

自分の運命を察知し、男は体を震わせた。要は構わず右手を上げて男を持ち上げる。目の前の空き缶用のごみ箱は、半分ほど空き缶が詰まっているが、これぐらいなら問題ない。

「やめ………」

バコオオオオン！

鈍い音と共に、要は男を頭からごみ箱に叩き込んだ。投げ技でも何でもなく、ただ力任せに無造作に。

未体験の衝撃に男は完全に昏倒し、倒れたごみ箱から抜け出る気配はない。要はそれを薄い笑みを浮かべて見ていたが、やがて、思いだしたように両手を合わせた。

「しまった……生ごみだったな」

男を叩き込んだごみ箱の隣には、「もえるゴミ」と書かれたごみ箱がある。本来はこちらが正しい。要は数秒無然とした顔だったが、すぐに気を取り直して言った。

「ま、いいか別に」

そのまま男には目もくれず、いつもより遅めの家路につく。 収穫
はなかったが、教訓はあった。

ごみの分別は忘れずに。

S I D E E N D

紅 S I D E

要が去ったのを見た紅は男の姿を確認する。

「まだ生きているか…」

男の姿から要の駆身、識身レベルを測りたかったが無駄なようだ。
武器だけで終わってしまった。

「仕方ない、次は王か」

そう言うとき紅の姿は消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5796o/>

覇者の三剣（トリスアギオン） 異端の剣守り

2010年11月16日01時34分発行